4. オオミスジ幼虫の食性と生息環境

田 中 蕃

オオミスジは本州中部地方以北の民家周辺に普通に見られ，幼虫はウメ，スモモ，アンズ，モモなどの大陸原産といわれるバラ科の *Prumus* 属植物を食べることがよく知られている．そのため，この蝶が人為的に食樹に付着したまま移入されたのではないかという説もある．しかし野外の幼虫調査によって，在来種のエドヒガン（過去にヒガンザクラとして1回報告されている）が重要な食樹であることが判明した．またオオミスジの分布は温帯林分布に一致するが，自生のエドヒガンの分布は暖帯にまで広がっており，他に温帯に自生する在来の食樹が見出せないならば，地理的気候的な要因が本種の分布を強く規制しているものであり，外来種説については疑問な点が多い．

5. オオゴマダラの地理的変異について

牧 林 功

オオゴマダラ（*Idea leuconoe*）の斑紋の変異はなかなかつかみがたいが，2，3の点について数量化し，沖縄諸島および台湾，蘭嶼の標本について比較検討した．

第1点は第4，5，6室の亜外縁の白帯の幅の合計を前翅長との比であらわした．その指数の M±S.D. は沖縄本島の♂で15.86±0.37，♀で13.84±0.55，石垣島の♂16.34±0.63，西表島の♂17.53±0.31，♀16.72±0.38，与那国島♂16.77±0.58，♀17.07±0.64，台湾♂12.21±0.27，♂14,41±0.46，蘭嶼♂10.99±0.31，♀12.40±0.37をえた．この結果および他の点などからみて，沖縄諸島の亜種 *liukiuensis* における沖縄本島のものと八重山諸島のものとの差は亜種 *clara* と亜種 *kotoshoensis* との差より大きいことを知りえた．

6. ボルネオ島サバ州の *Catopsilia scylla* について

原 聖樹・岩重 力・伊藤哲夫

演者らは，1972年12月26日～73年1月10日，キナバルカンアオイ(？)を求めてボルネオ島サバ州を訪れ，蝶を主とした昆虫類調査を実施したところ，現地で多数の *Catopsilia scylla* を観察する機会があった．

本種について，同島における♀の初記録を中心として，現地での調査状況・成虫の習性・発生状況・生息環境・今後の課題などについて講演した．亜種名・季節型などの問題についても，研究を継続してゆきたい．

7. ヤマトシジミの配偶行動

鈴 木 芳 人

ヤマトシジミの配偶行動は，雄による雌の発見にはじまり，雌の側面または後方に着地，翅を水平にひろげこきざみに震わせて接近，腹部をまげて交尾するという一連の行動で終る．この間，雌は外見上無反応によって雄を受け入れる．モデルを用いて雄の各行動を解発する要因を調べたところ，最終段階に至るには，姿勢，大きさ，色などの要因が満たされる必要がある．晴天下では雌雄の翅の裏面，曇天下ではさらに雌の表面が雄の一連の行動を解発する．交尾回避行動は雌雄ともに翅をすばやくはばたかせる行動を示すが，これは十分儀式化した行動というより，翅の接触による物理的追い払い効果が大きい．雄による飛翔する対象の認知は十分調べていないが，着地の前に追飛という過程が入ることが，雌の体の前後の確認に役立っているらしい．

8. 石垣島産ヒメジャノメの幼生期について

高 橋 真 弓

石垣島産のヒメジャノメは，奄美諸島および沖縄本島などに産するものとともに subsp. *madjicosa* Butler として日本本土産のものと区別されているが，幼虫の形態および色彩のほか食性にも本土産のものとの相違がみられる．幼虫は1齢から5齢（終齢）にいたるまで顔面が黒色で，3齢以後に淡褐色と暗褐色の斑模様となる本土産のものとは異なっている．頭部の突起は3齢以後に相対的に長くなり，終齢で著しくなる．体色は1～2齢は緑色型，3齢期には褐色型が現われ，4齢以後はすべて褐色型となる．ハチク，ススキを好んで食するが，シバでは2齢以後

発育が悪くなる．スズメノカタビラはまったく好まず本土産のものとは異なる．また本土産のものと同様カモジグサを好まない．蛹はすべて緑色型で，前端部，背部尖端，前翅後縁などの稜が黄白色となり，背部の形状も若干本土産のものとは異なっている．

9. *Papilio aegeus* の系統的位置に関する一考察

阿江　茂

ニューギニアよりオーストラリアに産する *P. aegeus* は，成虫の色彩および *Citrus* 属を食樹の一つとしている点では，モンキアゲハなどのクロアゲハの仲間にふくまれるが，幼虫の各節に少なくとも1対ある肉質突起が終齢に至るまで大きいことで，日本およびその近くの地域に産する *Papilio* 属のいづれとも明らかに異っている．日本産の *Papilio* 属との交雑による実験の結果は，シロオビアゲハとは F_1 の♀♂の成虫を生じ，モンキアゲハ，ナガサキアゲハとは F_1 ♂成虫のみを生じ，アゲハ，ミヤマカラスアゲハ，キアゲハとの F_1 は蛹または4齢幼虫に達した．これらの点からは，日本産の *Papilio* 属とかなり近い関係にあることは明らかと思われる．さらに種々の面よりの研究が望まれる．

10. 欧州産コムラサキ類の雑交実験

高倉忠博

演者は現在，英・仏の研究者と共同でコムラサキ類の飼育実験（飼育地は英仏）を進めている．昨1972年7月中～下旬，実地観察と採集を兼ね，人工交配技術指導のため両国を訪れた．パリ東郊の森林で *ilia* の各型を♂のみ採集し，共同研究者の飼育した *clytie* 型の成虫と蛹を貰いうけ，英国に持参した．英国の共同研究者は *iris* の保護増殖に努力しており，当時，オーストリア産の *iris* も飼育していた．その折，*clytie* ♂ とオーストリア産の *iris* ♀ を試みに雑交させた．筆者の帰国後，英国において雑種 F_1 の幼虫が孵化し，少数が成育した．同年9月末，早くも F_1 幼虫は4齢で老熟し，翌月，きわめて小型の個体を生じたとのことであった．この標本2頭を送付して貰い，比較考察を試みた．その結果，用いた *clytie* ♂ は，*ilia ilia*（黒色型）の因子をもっている heterozygote であろうということおよび，*iris* は *ilia ilia* と同じく，赤褐色発現因子に対し劣性遺伝をすることが推察された．F_1 に両型を生じたからである．

11. フィリピン産チョウ類数種の生活史

福田晴夫

1973年4月17日から9月11日まで，ルソン島ロスバニョスを中心にチョウの生活史調査に従事し，断片的な記録を含めると80種あまりの生活史に関する知見をえたので，日本であまり知られていない属から30種をえらんで報告した．

はじめに予定した主な内容は，ジャノメチョウ科の *Zethera* が台湾産の *Penthema* ときわめて近縁であること，*Acrophthalmia* と *Ragadia* 両属の食草がシダ植物のイワヒバであることなどであったが，時間を延ばして，同科の *Orsotriaena*, *Ptychandra*, *Elymnias*, ワモンチョウ科の *Faunis*, *Amathusia*, タテハチョウ科の *Doreschallia*, *Vindula*, *Cethosia*, *Polyora*, *Charaxes*, *Phalanta*, *Cupha*, アゲハチョウ科の *Lamproptera*, シロチョウ科の *Valeria*, *Gandaca*, *E rema*, *Appias*, *Leptosia*, シジミチョウ科の *Bindahara*, *Pithecops* ほか3属などの幼生期をスライドで紹介した．